

天声人語

人間の作ったロボットが人間を攻撃し始めるのは、SF映画の定番だ。潮流の一つに、チエコの作家チャペックによる戯曲「ロボット」がある。なぜ人間に刃向かうのか、彼ら自身が語る理由が不気味だ。「あなた方がロボットのようではないからです。……ロボットのように有能ではないからです」（千野栄一訳）▼ロボットの頭脳となる人工知能の進歩がめざましい。この分野への投資は世界的なブームとも聞く。明るい未来につながるのだろうか。一方で警戒する人もいる▼「完全な人工知能が開発されれば、人類の終焉を招くかもしない」。名高い宇宙物理学者ホーキング博士が、英BBC放送に語っている。知力で勝る人間は多くの生き物を圧倒し、絶滅させた。同じことが起きないとも限らないと▼人間を超えたものに人間はどう映るだろう。人工知能の取材を重ねてきた米国のジェイムズ・バラット氏は近著で大意こう推し量る。「あなたが、ネズミが看守の牢屋で目を覚まし、自分がネズミに作られたと知つたら、どういう感情を抱くだろう。畏れ？ 敬愛？ きっと違うだろう」▼もっとも現場の研究者に聞くと心配する水準ではないという。学習能力は「まだ2歳児程度」の声もある。だが、2歳児と比べられるところまで来たと見ることもできる▼大人になって、我々を超えるのにあとどのくらいだろう。いい助つ人でいてくれるのか。忘れていけないのは、巨大な技術はとにかくに私たちに牙をむくということだ。

2015・10・4